

Title	今年度の重力観測隊
Author(s)	
Citation	天界 = The heavens (1929), 9(102): 446-446
Issue Date	1929-08-25
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/161462">http://hdl.handle.net/2433/161462</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

澤山のスペクトルが撮影されました。1925年にニウヘヴン市に於けるスワースモア觀測隊では、短かい焦點の格子ミ、ダイチアニンを塗つた感光板ミを用ゐて、 $\lambda$  6100 から 18800 までにわたる赤及び赤外部のフラシ・スペクトルの立派な寫眞を撮りまして、之れによつて太陽に酸素の存在するこゝを證據立てました。今 1929 年の日蝕にも、同じ器械を用ゐ、尙ほネオシアニ液を用ゐて、一層長い波長の方へフラシ・スペクトルの智識を據張する計畫を行ひました。

日蝕については、尙ほ此の外に、多くの研究問題が集まつて居ます。其のうちの只一つを茲に附言するに止めませう。それは即ちアインシュタイン原理によつて豫言された意味に於いて、太陽の近くを通る光線の屈曲を實證する試験であります。1919年には英國の觀測隊、1922年にはリク天文臺の一隊が、何れも見事な成績を得ましたが、今 1929 年の日蝕には此の目的のために今までの日蝕に見られなかつたほど非常に多くの觀測が行はれました。此等の觀測の結果如何は今數ヶ月後でなければ分明しませんが、ミにかく、私の意見では、アインシュタイン原理を證明する方法ミして、此の日蝕の時の光線屈曲を觀測するほど決定的な方法は他に絶對にありません。云々。

### 今年度の重力觀測隊

例年の如く、今年も文部省測地學委員會の事業ミして朝鮮方面の重力及び地磁氣觀測のため、京都帝國大學理學部の松山教授、熊谷助教授、秋葉上島、森川三理學士、稻葉通義氏等の一行が、去る七月十二日に京都を出發せられた。觀測豫定地は主ミして朝鮮の東岸で、元山、城津、鏡城、成津、高城、江陵、蔚珍の七ヶ所を順に巡る筈であつたが、途中で松山教授が病氣になられたので、多少プログラムが變更された。ミにかく今は略々此の所々の觀測も終りに近づいたらしい。來る八月二十五日頃には一行が京都へ歸着せられる筈。但し松山教授は去る八月十日に歸洛された。(八月十五日記)

尙ほ此の事業については「天界」第77號第346頁、同第92號第39頁、ブレテン第124號、同第154號等のほか、「天文年鑑」第272頁以下を見られよ。